或　問 WAKUMON 73
No. 2（2001）pp.73～77

上海沙船船主郁松年の蔵書

松浦　章

I　緒言

清代において長江河口の上海を中心に、特に大陸沿海の遼東、華北沿海地域との航運を支配していたのが上海の沙船船主であった。彼等各船主は数隻から数十艘の沙船を所有し、東北地域や山東の穀物類を江南にもたらし、江南産の綿花や日常雑貨、茶葉等を北方地域に沙船と呼称される帆船で海上輸送していた。

その船主のなかでも数十艘の沙船を所有していた一家に上海の郁家がある。郁家は清代の道光年間には 6、70 隻の沙船を所有していたことが知られる。この時期の郁家の松年も船主であったが、また同時に宋元時代の貴重な版本等の蔵書家としても有名であった。

郁松年は「清末上海人、字萬枝、号泰峰、一に泰豊と作る。清末の大船商である。道光二十五年（1845）の恩貢生、財産が豊かであるため、宋人の典籍の未出版あるいは絶版のものがあれば金額の高価なるを惜しまず、余すところなく求め、藝芸書舎、水月亭、小説書堆、五硯楼に所蔵し、もと黄氏（丕烈）の百宋一廛の蔵書は汪門源に帰したが、後に郁氏の所蔵するところとなった。蔵書数十万巻、自ら校訂した。元明の旧本の少ないものを出版もしている。道光二十一年（1841）に至り、12 種を選び、『宜稼堂叢書』と名付けた。没後、その蔵書は散逸し、北は聊城の楊氏（以増）海源閣に帰し、南は常熟の瞿氏（秉淵）の鉄琴銅剣楼に帰し、又一部は上海道台であった広東人の丁日昌の持静斎の所蔵となり、松江知府で湘潭の人であった袁芳瑛も所蔵するところとなった。蔵書印には「泰峰」、「郁泰峰己酉年所収書印」、「曾在郁泰峰家」、「泰峰所蔵書」、「泰峰所蔵善本」、「曾在上海郁泰峰家」、「曾寄申江郁氏処」等がある。」[1]　とされている。

そこで、この郁松年のことに関して若干述べてみたい。

II　『宜稼堂叢書』

道光二十三年（1843）頃に上海で刊行された叢書に『宜稼堂叢書』がある。この叢書は 7 種類の佚書に札記を付して刊行されたものである。同叢書に収められた書籍には次のもので

ある。

(1) 『續後漢書附音義義例札記』48巻

(2) 『續後漢書札記』94巻

(3) 『数書九章附札記』22巻

(4) 『詳解九章算法附纂類札記』3巻

(5) 『楊輝享法附札記』7巻

(6) 『剡源集附札記』31巻

(7) 『清容居士集附札記』51巻

以上の7種の書籍を『宜稼堂叢書』として刊行したのが、「上海郁松年泰峰」である。これら7種類の書にはいずれも「上海郁松年泰峰、書於宜稼堂」とあるか、類似の表現で序が記されている。その時期の最も古いものが『清容居士集附札記』51巻で道光二十年（1840）四月朔日であり、最も新しいものが『續後漢書札記』94巻で道光二十二年（1842）冬である。『宜稼堂叢書』は道光二十三年頃に刊行されたと考えられる。郁松年の書斎の名が宜稼堂であり、宜稼堂には後述のように膨大な蔵書があった。

III 郁松年と蔵書

同治『上海縣志』巻二十一、人物、国朝下に郁松年の伝が記されている。

> 郁松年字萬校、號泰峰、恩貢生。父潤桂字准林、菩居積家果錘萬。兄彰年字尭封、號竹泉、多才幹、有知人穏。松年好讃書購藏敷十萬。巻。手自校讐、以元・明舊本世不多見。刊宜稼堂叢書。

松年は諱であり字が萬枝、号が泰峰であった。郁家の系譜はこの伝記からも知られるように父が郁潤桂で、兄が彰年であり、松年は次子であった。

郁松年は書籍好きで、数十万巻の蔵書を所有し、その蔵書の中には元、明以来散逸していた書籍を探し出して復刻し刊行した。それが上記の『宜稼堂叢書』である。郁松年泰峰の購書の様子を、『清稗類鈔』稗七二、鑑賞類の「郁泰峰蔵書於宜稼堂」に次のように記している。

> 郁松年字萬枝、號泰峰、上海恩貢生。饒於財、凡宋人典籍、有未刻或刻而版廃者、軌不借重貿。

とあるように、郁松年泰峰は豊かな財源をもって、宋代に刊行されず抄本のままであった原稿を刊行し、また既に刊行されたが散逸していた典籍を収集したのであった。そのためには金銭を借しまなかったとされる。

郁松年の書籍収集の様子の一端は『清稗類鈔』稗七二、鑑賞類の「陸存斎蔵書於皕宋楼」に、郁松年の購書の様子が見られる。

> 道光時、上海郁泰峰茂才以六百金得元刊『玉海』於揚州鹺賈家。

元刊本の『玉海』を揚州の塩商から 600 両で購入したことが伝えられている。周知のように揚州の塩商と言えば、清代において巨富の代表とされる財産家を意味するほどであるからである。[2)]

IV　郁松年購書の財源

上記のような高額の書籍の購入が可能であった郁松年泰峰は、その財源を何で得ていたかを次に述べてみたい。

『清代日記匯抄』（上海人民出版社、1982 年）に収められた「忍黙恕退之斎日記」の咸豊五年（1855）十二月二十五日の条に、上海船商の 24 家の第 2 位として「郁森盛泰峰」の名が見える（240 頁）。郁森盛は郁家の商号と考えられ、郁松年の兄彭年も使用していた。郁松年の父潤桂が巨万の富を築いた（上記、同治『上海縣志』）のは数拾隻の沙船（図 1 参照）を所有する船舶経営者であったことによる。郁松年泰峰が船商として咸豊八年（1858）当時 50 余隻の船舶を所有していたことからも明らかなように、彼の購書の財源は沙船業経営によるものであった。[3)] 郁森盛は咸豊六年（1856）に銀幣を発行している。清末における上海で最初の銀幣とされるもので、郁森盛は 3 種類発行したことが知られる。[4)]

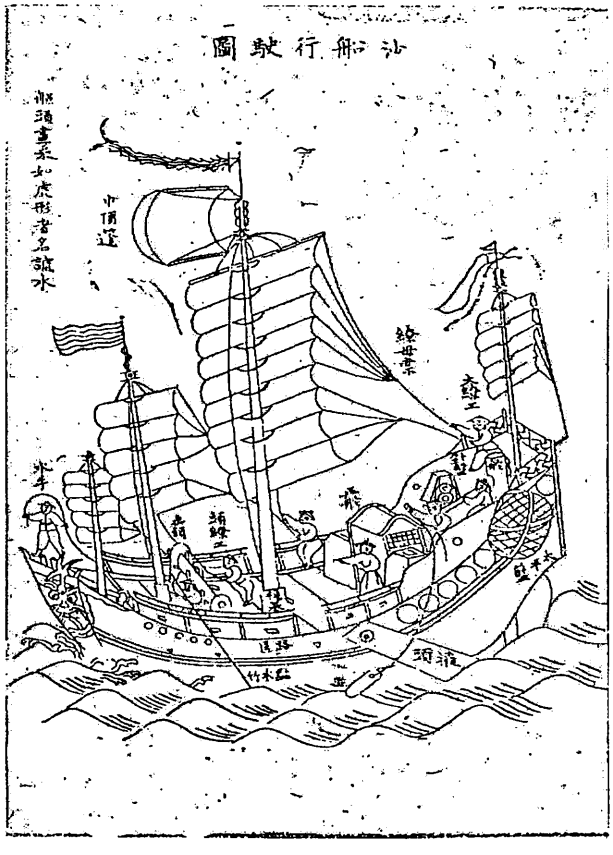

図1　沙船図（出典『江蘇海運全案』巻十二、十九丁裏）

（1）　表　咸豊六年上海縣號商郁森盛足紋銀幣　（写真1参照）

　　裏　朱源裕監傾曹平實重壱両銀匠豊年造

（2）　表　咸豊六年上海縣號商郁森盛足紋銀幣

　　裏　朱源裕監傾曹平實重壱両銀匠平正造

（3）　表　咸豊六年上海縣號商郁森盛足紋銀幣

　　裏　朱源裕監傾曹平實重五錢銀匠王壽造

（1）～（3）のように1両銀幣が2種類、5錢銀幣が1種類の発行が知られる。これらは、郁森盛が発行したのであるが郁松年泰峰の時代であった。同時期の沙船の船商であった王永盛も同種の1両銀幣、5錢銀幣を各一種類。経正記が1両銀幣を一種類発行している。加藤繁博士が「王永盛・郁森盛並びに経正記は孰れも錢荘の牌號であろう」とされたが、[5] 王永盛、郁森盛、経正記等はいずれも沙船業の巨商であった。[6]

咸豊八年（1858）の天津条約によって東北沿海部の港牛荘（Newchwang）や山東の登州が対外開放され、外国汽船の入港が可能となった。しかしこれら外国汽船による東北、華北産の豆類の上海方面への輸送を禁止する＜豆禁＞があり、長河河口の沙船等にのみ豆類の海上輸送が許されていた。ところが、同治元年（1862）にその＜豆禁＞が解除されたことから、沙船業は大打撃を被ったのである。[7] 郁氏の沙船経営も少なからざる打撃を受けたと思われる。

写真1　郁森盛銀餅（出典『老上海貨幣』上海人民美術出版社1998年1月、8頁）

V　郁松年蔵書のその後

同治元年（1862）頃に郁松年泰峰が亡くなったようで、「同治初元、宜稼之書散出」と言われるように郁松年の蔵書も散逸の危機に瀕した。[8]

宋元の重要書籍は丁日昌の持静斎に入り、その他のものは有名な蔵書家であった陸心源等の蔵書となった。その数約4万8千余冊と言われている。陸氏の蔵書の一部はその後、東京の静嘉堂文庫に所蔵されていることは周知の通りである。

蜀大字本周礼残本、同左伝、咸平単刊本呉志、八十巻本読史管見、宋大字本国朝諸臣奏議、宋開禧刊本周益文忠公集、蜀大字本三蘇文枠の如きは、共に宜嫁の旧蔵にして明後の佚書、人間見るを得ずと曰はるる所なり。[9)]

とある。佚書の多くが郁松年泰峰が収集したものであり、陸心源の手を経て静嘉堂文庫の所蔵となっている。

注

1. 梁戦・郭群一編　『歴代蔵書家辞典』（陝西人民出版社、1991年10月）267～268頁。
2. 佐伯富　『清代塩政の研究』（東洋史研究会、1956年10月第一版、1962年8月第二版）303～304頁。
3. 松浦章　「清代末期の沙船業について」（『関西大学文学論集』第39巻第3号、1990年2月）。
4. 蒋仲川『中国金銀幣図説』（1939年上海初版、1966年6月香港龍門書店）37～39頁。
5. 加藤繁　『支那経済史考証』下巻（東洋文庫、1952年3月）455頁。
6. 『清代日記匯抄』240頁。
7. 同注3。
8. 島田翰　『皕宋楼蔵書源流考』
9. 『静嘉堂文庫漢籍分類目録』（1930年12月）所収「静嘉堂文庫略史」4頁。

近代東西言語文化接触研究会の活動

第1回研究例会

日時：1999年11月28日（日）14:00-17:30

場所：関西大学新関大会館北棟3F33会議室

発表者と発表題目：

宮田和子（東亜学院）	鄭其照の『字典集成』について
永井崇弘（福井大学）	淺文理訳聖書の文体構造について
内田慶市（関西大学）	漫談“您nin”

第2回研究例会

日時：2000年4月29日（土）14:00-17:30

場所：関西大学新関大会館北棟3F33会議室

発表者と発表題目：

木津祐子（京都大学）	唐通事唐話研究のために
奥村佳世子（関西大学・非）	『唐話纂要』と『唐語便用』の語彙
谷口知子（関西大学・院）	「望遠鏡」について

第3回研究例会

日時：2000年7月30日（日）14:00-17:30

場所：関西大学新関大会館北棟3F33会議室

発表者と発表題目：

西山美智江（関西大学・非）	『江鮑笑集』にみれる呉語と官話
陶　徳民（関西大学）	清板「二弁」を祝う泊園の賀宴 ——幕末期における徂徠学の動向——
竹内　誠（京都外国語大学）	清末民初の新聞小説に見られることば ——冷佛の実事小説を中心として

第4回研究例会

日時：2000年12月9日（日）14:00-17:30

場所：関西大学岩崎記念館2F会議室

発表者と発表題目：

宮田和子（東亜学院）	典拠調査の周辺——英華辞典を中心に——
朱　京偉（北京外国語大学）	明治における近代音楽用語の形成と中国語への影響
荒川清秀（愛知大学）	地名の意訳

第5回研究例会は、2001年5月12日（土）関西大学にて開催される予定。
発表者を募集中！希望者は内田、または沈までご一報ください。